

Raffiné Journal vol.27

笑いながら、歌う

笑ってしまうような歌なのに、
なぜか少し寂しさが残る。

軽やかな言葉の奥で、
何かが、形を変えて置かれている。

それは、
そのままでは外に出ないものかもしれない。

サザンオールスターズの歌を聴いていると、
ある違和感が残る。

軽やかで、少しふざけていて、
思わず笑ってしまう言葉が並んでいる。

けれど、その奥にあるものは、
軽くはない。

むしろ、
そのままでは扱えない種類の感情が、
別の形で置かれているように聴こえる。

なぜ、
笑っているのに、寂しさが残るのか。

サザンの曲には、
遊び心のある言葉が多く使われている。

言葉の選び方も、音の置き方も、
どこか軽く、流れるように進む。

けれど、その流れの中で、
ふと、引っかかる瞬間がある。

笑って通り過ぎるはずのところに、
残ってしまうものがある。

それは、
言葉そのものではなく、
その奥に置かれている感情の方かもしれない。

近すぎる感情は、
そのままでは外に出ない。

強すぎるものほど、
直接触れた瞬間に、壊れてしまうからだ。

だから人は、
それを少しずらす。

軽くしたり、
笑いに変えたり、
音に乗せたりする。

その方が、
かえって深いところに触れることがある。

桑田佳祐さんの歌は、
その“ずらし方”が独特だ。

まっすぐ語らない。
軽く外す。

けれど、
外したことで消えるのではなく、
むしろ残る。

笑っているはずのフレーズの中に、
人の弱さや寂しさが、
そのまま置かれている。

隠しているのではなく、
形を変えて存在させている。

本音は、
そのままでは表現にならない。

近すぎるからこそ、
一度形を変える必要がある。

軽さの中に置かれたとき、
はじめて外に出るものがある。

人は、
寂しさをそのままでは歌わない。

だから、
笑いながら歌う。

R.

Raffiné Journal vol.27
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné